

建築は誰のものか？

建築ふれあいフェア 2012 統一テーマ “未来へ～”

- 日 時 : 10月1日(月) pm1:00~3:00
- 会 場 : 新宿西口広場イベントコーナー会場内 インベントスペース
- 参 加 費 : 無料・どなたでも自由に参加できます。
- 企画進行 : 建築文化ネットワーク

私たち建築の設計・創造に携わる人間にとって、『未来』ということはごく当たり前のことに思えます。それは、設計とか創造というものはいつも現在に立脚しながらも「未来」を描き出しつくりだそうとする営為であるからです。「未来」には幅があります。語感的には未来は「将来」よりは大分先のことのように思えます。とは言え「未来」と言う響きは理想に包まれ、ともすれば実現性を無視した夢物語のようにすら思えます。しかし設計の実務行為は実現するかどうかを棚上げしては行ない得ません。実現させなければならないのです。その過程で、たくさんの妥協が行われ、ややもすれば理想の変節などが介在して来ます。否、むしろ多々の事情で、実現させること自体が自己目的にすらなってきます。



今回のシンポジウムはふれあいフェア全体の統一的なこのテーマに立脚しつつも、かなり直接的で鋭利な問い合わせのフレーズとなっています。題して「建築は誰のものか？」。スローガンとも取れるこのフレーズの末尾の「？」はむしろ「！」であるべきかも知れません。なぜならば、これを読まれる方々の多くの方には建築が誰のためのものであるかは、言わば自明のものであるからです。そしてその自明さはある種の理想であり、残念ながら現実性はあまねくのところ帶びてはいないことを受け容れざるを得ないからです。それで良いのかという反問があります。それ故の叫びとも言えます。そしてこのことはまちなみや景観ということがらについても同じことが言えるでしょう。

一方、ここで取り上げようとしている「建築」とは、どういう建築物でしょうか。価値があると言われている建物や景観が一つまた一つと失われて、より「高度な経済的効率性」にとって代わられていこうとしている社会的状況を背景にしつつ、それはやはり特別の、或いは由緒のある、歴史的にも著名な建物に限られることでしょうか。それらが含まれることは当然と言えますが、それに含まれないような多くの建物はこのテーマの投げかけとは無関係なことでしょうか。無関係であるとしても、それで良いのでしょうか。さらに、それで良いとして、それはなぜなのでしょうか、いずれも答えを探すのは容易なことではありません。

またある意味ではこうした理念的な論究の傍ら、東日本大震災で失われた多くの人命とともに多くの損なわれた建築が存在する現実を忘ることはできません。この現実とどう向き合うのかが私たちには問われています。

そこで、今回で第6回目を迎えるこのシンポジウムでは、パネリストの方々にこうした観点から意見をたたかわせていただき問題を深めてみたい、という趣旨を以って企画を組み立てみました。

- | | | | |
|----------|---|-------|-------------------------------------|
| コーディネーター | : | 兼松紘一郎 | 建築家/JIA/DOCOMOMO Japan/建築文化ネットワーク代表 |
| パネリスト | : | 小岩 勉 | 写真家/仙台在住 |
| | : | 中村文美 | ジャーナリスト/建築ジャーナル編集長 |
| | : | 増田一真 | 建築構造家/伝統木構造の会 会長/新建築家技術者集団 会員 |
| 総合司会 | : | 川田伸紘 | 東京都建築士事務所協会 会員/建築文化ネットワーク 事務局長 |



プロフィール

コーディネータ



かねまつこういちろう
兼松紘一郎

建築家 兼松設計主宰。1940年東京杉並生まれ。1962年明治大学工学部建築学科卒。

(社)日本建築家協会(JIA)理事、関東甲信越支部保存問題委員会委員長、DOCOMOMO Japan幹事長など歴任。現在/JIA建築家写真俱楽部会長・(社)日本建築学会:歴史的建築リスト整備活用小委員会委員、神奈川県立近代美術館100年の会(近美100年の会)事務局長、熱海市旧日向熱海別邸等研究委員会などに携わり、建築のあり方を考え、建築の保存に関わりながら建築文化を社会に伝えることに尽力している。

著書/建築家の清廉・上遠野徹と北のモダニズム(共著、建築ジャーナル)。喪われたレーモンド建築(共著、工作舎)など。

建築文化ネットワーク代表。

パネリスト



こいわ つとむ
小岩 勉

写真家 1962年岩手県一関市生まれ。宮城教育大学教育学部卒。

東北造船等の労働運動、各地の住民運動などのドキュメンタリーを撮影後、原子力発電所のある宮城県女川町の日常を長期で取材。また、街と生活を写真で記録するワークショップと市民参加型の出版活動を、宮城県本吉町(現、気仙沼市)で11年、仙台市で5年続ける。

現在/東北芸術工科大学・会津大学短期大学部非常勤講師、仙台アーティストランプレイス(SARP)運営委員。

写真集/「女川海物語」カタツムリ社、「FACES OF HUMANITY」共著、「野守の鏡」私家版。仙台、東京等の個展多数。

パネリスト



なかむらあやみ
中村文美

編集者 建築ジャーナル編集長

1971年愛知県生まれ。立命館大学産業社会学部卒業後、メーカー勤務を経て、1998年建築ジャーナル入社。2009年月刊誌『建築ジャーナル』編集長、現在に至る。

『建築ジャーナル』の編集方針、「市民、利用者にとっての建築・都市」、「地球環境に負荷をかけない建築・まちづくり」の実現に向けて、誌面では市民に愛されてきたモダニズム建築の保存活用問題、建材および設備機器などが原因によるシックハウス、電磁波・低周波音による健康被害などを継続的に取り上げている。建築・住まいに関わる諸問題の改善を目指して、建築専門家だけでなく、一般の方々が諸問題に関心をもち、参加したくなるような誌面づくりに日々奮闘中。

パネリスト



ますだかずまさ
増田一真

構造家

1934年広島県生まれ。1958年東京工業大学建築学科卒業、1961年東京大学生産技術研究所・田中尚研究室。

現在/(株)増田建築構造事務所 代表取締役、NPO伝統木構造の会会長、新建築家技術者集団会員、伝統を未来につなげる会代表、NPO木の建築フォーラムなど。

建築物の構法、架構方法についての研究と普及活動に力を注いでいる。

著書/数式の無い構造力学、建築構法の変革/架構のしくみで見る建築デザイン、日本の木造架構史、建築設計資料61 木構造、新伝統木構造の展開、など多数。

受賞/技術科学図書文化賞、松井源吾賞、国土技術開発賞最優秀賞、ものづくり日本大賞など。

趣旨説明・司会



かわたのぶお
川田伸紘

1944年兵庫県生まれ、神奈川県の江ノ島で育ち、片瀬小学校江ノ島分校に通い、青少年期は藤沢市内で送った。

東京芸術大学建築科卒業。その後10年ほど同大学に勤務して前野研究室に籍を置き、歴史的建造物の構法や意匠の調査研究など気ままな時を過ごした。その間、共同で設計事務所を設立経営。後に独立して現在に至る。

現在/株式会社K設計工房 代表取締役。

その傍ら、建築運動や地域と住環境保全などの運動に携わり、ミニコミWEB紙“くらしとまちづくり”を主宰、編集発行してきた。

一般社団法人東京都建築士事務所協会会員、建築文化ネットワーク事務局長。